

# 論文(一)

## 初期狂言台本にみえるオノマトペ

——天正狂言本の場合——

柴田雅生\*

### 一 はじめに

標題に掲げた初期狂言台本とは、具体的には天正狂言本および祝本狂言集を指している。現存する狂言台本の中でも第一に挙げられること多い大藏虎明本より古いものを扱うという意図である。何故この二つの狂言台本を扱うかと言えば、狂言台本のオノマトペとして、なるべく固定化・定型化していない段階のものを追いつめるためである。したがって、筋書き・台本定着期の台本として扱われる大藏流の虎明本や和泉流の天理本といった、十七世紀前半期の狂言台本以前が対象となる。

本稿では、このような観点から、まずは天正本に見られるオノマトペ

について調査・考察した結果を述べていくこととし、祝本については別稿を用意している。

### 二 調査・考察の方法

最初に、調査・考察の前提となることについていくつか取り上げる。まず、用語としては標題にあるようにオノマトペを用いる。これについて現在もお議論の余地があるかもしれないが、『日本語学大辞典』の項目として、擬音語・擬態語ではなく、オノマトペが取り上げられるようになった現在、擬声語や象徴詞といった多種多様な語句によらず、統一的に扱える用語として選択したためである。

ただ、個々の語について、オノマトペであるか否かの判断をどのように下すかについては、今なお大きな課題が残っていると考える。こと、歴史的研究においては、往時の認識を踏まえることが基本であるが、それは実際問題として難しいと言わざるを得ない。現代語においてすら、程度の多少は別として、同様の課題はなお存在する。したがって、オノマトペをどのように認定するかは、便宜的な設定から始めた上で、その内実の検証によって修正することで進めていくほかはないのではないかと考える。

以上を踏まえて、本稿では、『時代別国語大辞典 室町時代編』と『日本国語大辞典 第二版』の立項語を中心として、歴史的視点を含んで編集されたオノマトペの専門辞書『日本語オノマトペ辞典』(小学館、二〇〇七年)を参照してやや広くオノマトペの範囲を定め、注意を要する語について考察を加えて判断するという方法で対応することとした。

考察に際しては、最初に示した問題意識に基づき、天正狂言本とほぼ

同時期に編纂された『日葡辞書』を重要参考資料として扱い、これに天正狂言本より少し後に書き留められたと考えられる大蔵流虎明本と和泉流天理本の本文との比較を加えるかたちで、それぞれのオノマトベの意味・用法を考えるという方法をとった。もちろん、先行研究である注釈書と古語辞典類も大いに参照した。

対象とする資料である天正狂言本は、天正六年写の識語（ただし、本文とは別筆）を有する現存最古の狂言台本である。現在見るような台本とは言いがたい曲も多々あるが、中には詳細に記されている曲もないわけではない。金井清光氏の名著『天正狂言本全釈』（一九八九年、風間書房）をはじめとして、先行研究は一定量あるものの、解釈が容易には定まらない部分も少なくなく、今後も考究を必要とする本ということができるだろう。

天正狂言本の言語上の特徴については、よく知られているように、東国語的要素の存在がある。文法形式や語彙、音韻変化、表記上の特徴等について種々の検討が加えられ、かなりが部分が明らかになっていると言っよいだろうが、ことオノマトベについてはあまり追究された跡がないように思われる。本稿が、天正狂言本を扱う所以である。

なお、本稿で用いる天正狂言本の本文には、内山弘編著『天正狂言本本文・総索引・研究』（一九九八年、笠間書院）を用いた。

### 三 天正狂言本にみえるオノマトベ

以下では、天正狂言本（以下、天正本と称する）においてオノマトベとして用いられている語の意味・用法について、曲ごとに検証していくこととする。

最初に曲名を漢字表記に改めてゴシック体で掲げ、現行曲名が天正本とは異なる場合には現行曲名を括弧に入れて添えた。その次に、当該曲中にあらわれるオノマトベを五十音順に並べ、それぞれのオノマトベの用例を出現順に掲げて示した後、解説を加えるというスタイルで示した。また、天正本のオノマトベ以外の部分には、適宜濁点と句読点を加え、必要に応じて振漢字を括弧に入れて添えた。

なお、先行研究として以下の三冊については略称を用いる。

- 全書——古川久校註『日本古典全書 狂言集・下』（一九五六年、朝日新聞社）
- 全釈——金井清光著『天正狂言本全釈』（一九八九年、風間書房）
- 総索引——内山弘編著『天正狂言本本文・総索引・研究』（一九九八年、笠間書院）

#### 〔酔辛皮（酔薑）〕

\*つつと

杉門をつつと入（17オ6）  
から門をつつと入（17ウ6）

現行曲の酔薑の舞台は道での行き会いであるが、天正本・酔辛皮では市場である。その市場に設けられた杉門と唐門をくぐって入るといふことであろう。二つの門の名には、酔売りが通る「酔き」門と、辛皮売りが通る「辛」門という要素が掛け合わされている。いずれの門についても、門を通り抜けるさまを「つつと」という素早い動作を表すオノマトベによって表現されている。『日葡辞書』では以下のように説明してい

る。

Tcutto. 非常に、または、近く、深く、など。『Tcutto coreye vogiare. (つとこれへおぢやれ) ずっとこちらへお寄りなご。』

(邦訳 日葡辞書、以下日葡辞書の引用は同書による)

ただし、大蔵流虎明本・酢薑では

すいもんのはしをす<sup>り</sup>りと渡<sup>り</sup>、する<sup>く</sup>と參<sup>て</sup>  
からもんを<sup>からり</sup>と<sup>あけ</sup>

とある。酢売りが通る「すいもん」が「水門」であるか「西門」の転訛であるかは判然としないが、門をくぐり抜けるのではなく、門の近くにある橋を渡るということであろうか。薑売りは唐門を「からり」と開けるのに対して、「するり」に「酢」が掛け合わされているのは確かであろう。

一方、和泉流天理本・酸辛の抜書では

から橋を渡<sup>り</sup>、から門に入<sup>り</sup>、  
すのこ橋をわたり、すのこゑんにあがれば

となっていて、酢売り・辛皮売りとともに橋を渡るという設定になっていて、しかも天正本の「つと」に対応する形容語句は使われていない。

天正本では、酢売りと辛皮売りの両者に「つと」という共通のオノマトベが用いられているのに対して、虎明本は酢売り・薑売りとともに売

り物に掛けた表現が取り入れられ、天理本は二人の動作を形容する語句が見られないということになる。

### 宝買心(宝の槌)

\*くわったりと

くわつちほくくわつたりとこれをならふてくる(18ウ9)

「くわったりと」の直前の文字について、全釈は「く」とひとまず解した上で、「く」は「く」ともよめる」とする。つまり「くわつちほく」と「くわつちほく」の二つの可能性を想定するのだが、前者については狂言三百番集(和泉流)にあるように「月氏国」を当て嵌めることは可能ではあるものの、後者は「不明」(全釈)としか言いようがない。総索引では「ぐわちちこく」「月氏国?」とし、同じく総索引部分での「くわつたり」については、対応する漢字表記および品詞を「?」、つまりは不明としている。

天正本のこの部分について、虎明本・宝の槌では「くわたくくわつたり」となっている。天理本・宝の槌は「くわつちこくくわつたり」である。天正本が「くわつちほく」あるいは「くわつちほ」のいずれであっても、「くわつ」という音形式を介して、オノマトベ「くわつたり」を引き出していることには変わりない。

「くわつたり」の直前の解釈が部分的に不明であっても、アドのたらし(詐欺師)が小切れを打出の小槌だと言って売りつける際に、小切れからさまざまな物を出す際に、固い物同士が当たって立てる音を「くわつたり」で表現しているのである。『時代別国語大辞典 室町時代編』で

は

かったりと(副)固い物が、他の固い物にあたったときなどに発する音の形容。「暖簾ニハ縁ノ木ガアツテ重ホドニ、カツタリト云ワヌヤウニ、手ヲツケソツトアゲヨゾ」(勅規桃源鈔四)

と説明している。

### 田植

\*ぞぶりと

けしやう文をたぶならば、田をばそぶりとぞとゆ。(20ウ5)

歌謡のみが記される曲であり、全釈では「本文中に歌謡の占める割合の大きい天正本としても異例のこと」と評されている。右は、男性(不詳、天理本では神主)とのやりとりにおいて、早乙女たちが「恋文をいただけのなら田に稲を「ぞぶりと」と植えましよう」と呼びかける部分である。全書は「水の中を歩き廻るさま。ぞんぶりぞ。」と解釈し、全釈では「ぞんぶりぞ。ぞんぶりこ。水をはね返したり、水音をたてて勢いよく動作するさまをいう副詞。」と記した後、名語記と狂言記・相合袴の例を掲げる。中でも『名語記』に

水ヲワタルヲトノ、ゾフリゾフリ、如何。答、ソコフムラシノ反ノ、ヒビキニアラハレテ、ゾブリトキコユル也。字ニハ并歟。ザブリ、同。(巻七、勉強社刊『名語記』には含まれない部分のため、全釈

の記載による)

とあるのは注目に値する。「ヲト」「ヒビキ」という語によって擬音であることが明示されているからである。水音を盛んにたてる田植えの様子によって、早乙女たちの心情も表現されたかたちとなっているのだが、天理本・田植の抜書には「へけしやうふみをたぶならば、さそなうれしからましへ」とあり、早乙女の心情の直接的表現になっている。

\*とららと

なわしろを、く、とららとならしすまして(20オ4)

全書の頭注は「とらり」と同じで、油のやうに平にの意か。」とする。これに対して、全釈では「とらら」「とろり」と同意で、iとaの母音交替。ふつう「とろりと」の形で副詞に用い、とろけてやわらかくなるさま。とろけて平らになるさま。べったり。べったり。」として玉塵抄と日葡辞書の例を挙げる。水を張って土が軟らかくなった田を平たく均しているさまの表現である。

「とらら」について「iとaの母音交替」という全釈の指摘は確かにそのとおりではあるものの、オノマトペにおいて音形が果たす役割は通常の語の比ではありえないと考える。『日本語オノマトペ辞典』の「解説―歴史の変遷とその広がり」(鈴木雅子氏執筆)も指摘する、中世期に見られるABラという語構成のオノマトペに該当すると見るべきではある。例えば、余計なものがないさまを表すスキリに対応するスキラが「面ヲモスキラト洗イ髪ヲモヨウ洗テ」(四河入海・三ノ二)となるのと同じである。

なお、この天正本の「とらら」に対応する部分が、天理本・田植の抜書では、

なわしろを、く、とららとならしすましつゝ

とあって、同じオノマトペが用いられている。

**茶ぐり(茶壺)**

\*じつと

袖をちつとひかいて(27ウ9)

「ふはの」の宿の遊女が客の袖を引くさまの表現であり、『日葡辞書』の

Itto. 副詞。締めつけるさま、または、手の中に物を握りしめるさま、など。『Teni jitto niguiru. (手にじつと握る) 力を入れて、物を手の中に握りしめる。

という説明が該当する。「ふはの」については、虎明本「こやの」、天理本「こや野」とあることから、「昆陽野」の宿であろうかと思われる。  
虎明本・天理本ともに

虎明本 こやのゝ宿の遊女が、袖をじつとひかへて

天理本(抜書) こや野ゝしゆくの遊女が、そでをじつとひかへて

とあって、天正本との違いは見られない。

\*そつと

こゝにそつとねたるに(28オ4)

茶壺を背負った男(虎明本・天理本では中国地方の男となっている)が遊女に酒を勧められて寝ていた時間がわずかであるさまの表現である。『日葡辞書』にある

Sotto. 少しばかり。(補遺篇)

があてはまる。ただし、虎明本・茶壺は「さけにゑいてねたれハ」、天理本・茶壺(抜書)では「酒に酔てねたるを」とあって、「そつと」に対応するオノマトペは見られない。

**鳴子遣子(鳴子/遣子)**

\*つくづく

さてもうき世のていをつくくとおもん見るに(29オ2)

虎明本や天理本では、仲裁するのが検断ではなく茶屋の主人となっていて人物設定は異なるものの、仲裁人が語る話の中で、西行法師が現世を注意をはらってとらえようとするさまの表現であることには変わりがない。

『Tqucuznucuto. 副詞。気をつけて、あるいは、注意を払って。』

『Tqucuznucuto miru, l. xian suru. (つくづく)と見る、または、思案する)よく注意して見る、または、とくと思いめぐらす。』

『日葡辞書』に「見る」「思案する」を形容する例文が掲げられているように、思考や知覚に関わる表現とともに用いられる語である。虎明本・鳴子や天理本・遣子(抜書)では意味が類似する「つらつら」が用いられている。

虎明本 「さとうびやうへのりきよと申人、つらくうき世のていをおもんみるに」とあり。

天理本(抜書) 佐藤兵衛則清といつし人、つら(つら)世間の有様をおもんみるに(括弧内の「つら」は誤脱とみて補った部分)

### 野老

\*ぐらぐらと

地ごくのかまになげ入られて、くらく<sup>レ</sup>とにやうらかして (40ウ9)

和泉流のみの曲である。「ぐらぐら」は野老(薯蕷)を煮る釜の熱湯が激しく煮え立つさまを示す。天理本・野老の抜書では

天理本(抜書) ちこくのかまになげ入られて、くらく<sup>レ</sup>とにゆる所を

とあって、天正本とほぼ変わりが無い。

\*ころり

ふちだかのすみをかため、あな(た)へころり、こなたへころりく<sup>レ</sup>ところびまわりしところ(43オ1・2、「た」追補)

転がるさまを表す「ころり」を単独もしくは反復させて用いた例である。天理本・野老の抜書でも

天理本(抜書) われらかやうなるにかきところは、ふちたかのすみを、あなたへころりこなたへころり、ころりころんてくをうくる

とあって、縁が高い折敷の上で野老が何度も転がる様を示している。

### うちみ(鱸庖丁)

\*からりと

はしはうちやうからりと<sup>レ</sup>なをし(46ウ4)

鯉を包丁でさばき終えて、箸と庖丁を元の位置に戻す際に立てる音の表現である。『日葡辞書』の次の説明が該当する。

Cararito. 副詞。木、あるいは、竹が互いにぶつかり合うとか、矢が弓に触れるとかするように、物がほかの物と接して音を立てるさま。『また、物を乾かし炒るさま。例、Cararito iraguru. (からりと炒り上ぐる) 乾かしきる、または、炒りあげる。』

『日葡辞書』では「からりからりと」という項目も立てられていて、「振鈴など、金属が音を立てるさま」という説明が施されている。材質の違いによる語句の使い分けとも解されるが、天正本のこの部分は金属と木または竹がぶつかって立てる音であろう。少なくとも、

Quararito. 副詞。戸をすっかり完全に開くさま、または、何か物をすっかり延べ拡げるさま。

ではないことは確かである。

当該部分は、天理本・鱸庖丁では

一の刀にてぎよ<sup>(魚)</sup>とう<sup>(頭)</sup>をつぎ、二の刀にて上<sup>(身)</sup>みをおろし、おろしもあへず、しつとくかへし、下みをおろし、中打、とうくどして、いざ、いり物してたべす

とあって、箸と包丁を戻す表現は見られない。虎明本・鱸庖丁では、次に見るように、さらに簡略化されたかたちとなっている。

さて其後にいたひきよせて、ふつはときつてしつとくうちつけ、

く、なみぬたまへる

\*さくと

みさごのひれをさくとつき (45ウ7)

\*ざくと

ぎふたふ<sup>(魚)</sup>にはしを立、ざくときつて (46オ4)

清濁の点で両者がどのような関係にあるか判断つけかねるが、ここではひとまず表記にしたがって分けるものの、一括して述べてゆくこととする。

前者の「みさごのひれ」とは、魚類を食する鳥・鵜が魚を捕らえる際に足で掴まえる魚の背びれ部分(大塚光信編『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』の頭注による)である。ここではそれを包丁で突くさまを表現している。後者は鯉の頭を勢いよく切るさまだが、こちらの仮名「さ」には前者にはない濁点が添えられている。「さくと」と「ざくと」のいずれかであったか、あるいは二つのオノマトベとして併存していたかは現時点で判断材料がない。ローマ字表記により清濁の判定が可能な『日葡辞書』にも立項がないため、ここではひとまず表記どおりに解しておく。ちなみに、天理本には天正本のこの二箇所に対応する内容が見られず、虎明本では前者についてのみ「ミさごのひれをはらりとおろし」となっている。包丁の使い方が異なる設定となっている。

\*さっさつと

つねの水かきさむくとし (46オ3)

この仮名「む」は促音を表記したのだが、全釈は「動作のすばやさまを表す擬態語」と解釈する。天理本では「れいしきの水こそげ、さつ〜と三度するまゝに」とあるように、まな板の上の水を拭き取るさまの表現である。

このオノマトペについては、その語形が問題となる。『日葡辞書』には「さっさと」を立項する。

Sassato. 紙とか布ぎれとかのよな物が裂け破れる音の形容。例、  
Sassato camiuo saqu. (ちぢちと紙を裂く) 音を立てながら紙を引き裂く。『Matcu figu caie sassato xite. &c. (松吹く風さつさとして、云々) 松の木に吹きつける風が音を立てて、云々。

この「さっさ」の語末に促音が挿入されて「さっさつ」となったものであるか。全釈では『桐火桶』の「百首にはまづ地歌を珍しげなくさつさつと読みわたして」という例を挙げている。

\*しつとりしつとりと

其後上身下身をすつはり〜とおろし、しむとり〜となをし  
(46オ7)  
上ふくめんより下ふくめん<sup>に</sup>いたるまで、しつとり〜となをし  
(46ウ3)

ともに「なをす」さま、具体的には前者が包丁でさばいた鯉の切り身を並べるさま、後者が三枚におろした中骨部分を上から下まで丁寧<sup>に</sup>に検

分するさまである。

Xitorito. 副詞。おとなしく、なごやかに、またじゃ、静かに。  
『Xitorito xita fito. (しつとりとした人) 温和でもの静かな人。

『日葡辞書』にあるように、いずれも落ち着いた様子で包丁を用いていることの表現である。虎明本・天理本では両者ともに該当部分に対応する表現、つまりは「なをす」ことの表現が見られない。

\*すっぱりすっぱり

上身下身をすつはり〜とおろし (46オ6)

鯉を三枚におろす際に、上身と下身を中骨からきれいに切り離すさまの表現であり、包丁の切れ味がよいことを示している。ただし、「すっぱり」は『日葡辞書』には立項されていない。『時代別国語大辞典 室町時代編』では「小気味よい切れ味で、次々と物を切つてゆくさま。」と語義を説明した後に、用例として天正本のこの部分と天理本(狂言六義)の鱸包丁「すっぱりすっぱりとつくって」を挙げる。ただし、天理本の例として『時代別国語大辞典 室町時代編』が挙げる箇所は、鯉をさばく部分ではなく、その後に膾をつくる場面の例である。

\*ちやうちやうど

中打ちやう〜と (46ウ1)

鯉の中骨部分を包丁でさばく際にたてる音の表現と解される。全釈で



は「金属性の非常にかん高い音がつづいて響くさまの擬声語。」とする。包丁師が二本の包丁を用いて三枚に下ろす時に、金属と金属がぶつかってたてる音である。「ちやうちやうど」は『日葡辞書』に

Chochodo. 副詞。打つさま。『Chohodo vtou. (丁々ど打つ) 手で人をなぐる。

とあるように、擬音の表現とは捉えられていない。しかし、『日葡辞書』の記述を手掛かりとするにも限界があると見るべきだろう。

右の部分は、天理本に「中打、とうくどして、いぎ、いり物してたべす」とある。「とうとうど」は『時代別国語大辞典 室町時代編』が

とうとう (副) 打ち鳴らす鼓・太鼓などの音の形容。また、音高く鼓・太鼓などをうち鳴らすさま。↓どうどう。

と説明する。「どうどう」については「重たいものが次次と崩れたり打ち当たったりしてたてる大きな音の形容。また、その大きな音が鳴り響くさま。」とする。「ちやうちやうど」とは大きな音であるらしい点では共通するが、その音の性質には若干の違いが認められるように思われる。ちなみに、『時代別国語大辞典 室町時代編』の「ちやうちやうど」は

①めりはりのきいた一定のリズムで、音をたてて勢いよく、物が打ちつけられるさま。②要素所要所を押えて、的確に事がなされるさま。(用例は省略)

と説明する。「ちやうちやうど」と「とうとう」は語形の上にも何らかの連関が想定できそうではある。

\*はらりと

はし・はふちやうをおつとつて、据ゑたる鯉をばきらずして、しひたる板を一けんはらりとはずし (45ウ6)

庖丁師の動きに無駄がなく、軽快なものであることを表している。ただし、『日葡辞書』にはここでの用法に該当する説明は見当たらないようである。

Farario. 副詞。すべて、あるいは、すっかり。

Parario. I. farario. 副詞。穀物など、何か物が落ちる際に立てる音の形容。『また、すべて、余すところなく。例、Parario tatta. (ばらりと立つた) 一人残らず皆立ち上がった。

天理本では「板とつてひきよせ」とあって、包丁師の動きを形容する表現は見当たらない。

ちなみに、「うちみ」は天正中でもっともオノマトベが多用されていると考えられる曲である。庖丁使いの様子表現にオノマトベを用いて印象を強くしているのであろう。

鳥説教

鳥の名や鳴き声が頻繁に洒落に用いられる曲ではあるが、現行曲にはない。したがって、天正本の本文のみで検討することとなる。

\*しとしと

かけす、しとくとあゆみより (51ウ3)

『日葡辞書』補遺篇に

Xitoxito. 副詞。物事をゆっくりときちんとするさま。例、Xitoxito monou suru. (しとしと物をする) 物事をゆっくりと念入りにする。など。(補遺篇)

とあり、落ち着いて静かに近づくさまと理解される。ただし、この部分は「鳥の名ホホジロの方言シトトをかける」(全釈)箇所であるが、歩み寄る鳥がカケスであるのに対して別の種類であるホホジロが取り上げられるなど、歩み寄るさまの単純な形容ではないだろう。

\*からからと

しもくおつ鳥、かも四十からくとうとふやすかた (51ウ5)

四十雀とオノマトペ「がらがら」が掛け合わされている箇所である。四十雀の鳴き声の聞きなしは、現代ではツーピーやジャージャーなどとする場合が多いようだが、『名語記』に

鳥ノ名ニシ、ウカラ如何 コレハカノ鳥ノナク音ノチンくカラくトキコユルラシ、ウカラトイヒナセル也(名語記・卷十三オ)

とあり、『名語記』に時折見られる牽強付会かもしれないが、その鳴き声が「からから」と捉えられていることがあったとわかる。

「からから」なのか「がらがら」なのかについては、『日葡辞書』には両方ともに立項されていて、にわかには判断しがたい。

Caracara. 副詞。大笑いするさま。

Caracarato. 同上。『Caracarato varo. (からからと笑ふ) 大笑いをする。

Garagarato. 副詞。振鈴、鈴、将棋の駒、胡桃などのなる音の形容。Garagarato. 副詞。石の山が崩れ落ちるさま、または、雷などの

鳴る形容。例、Caminariga guaragarato naru. (雷がぐわらぐわらと鳴る)

\*つくづく

みつくくく これをちやうまして (52オ2)

「つくづく」との形で「鳴子遣子」の項で取り上げたが、この部分は助詞「と」を伴わないかたちである。「ちやうま」は「聴聞」の音訛であると解されるから、神経を集中させ耳をすまして聞くさまということであろう。

\*ちんちん

ちんちん (53オ5)

この曲の末尾に置かれ、鉦の音が鳴ることでお務めの時間が来たことを示している。つまりは「ちんちん」で鉦の音を表している箇所である。『日葡辞書』には「Chinchinto xite. 静かに、おだやかに。」とあるが、この語義説明は漢語「沈々」を対象としたものと考えられるため、金属が立てる音としての「ちんちん」は『日葡辞書』には立項されていないこととなる。

恋の祖父(枕物狂)

\*はらはらと

はら〜とふる雨も (54ウ2)

『日葡辞書』に次のように説明する。

farafarato. 副詞。雨の降るさま、または、涙の流れ落ちるさま、または、敵勢を多く打ち倒して斬るさま。例、Tejino farafarato qirifuxete. &c. (敵をはらはらと斬り伏せて、云々) 敵を斬り倒し。

虎明本・天理本ともに右の箇所に対応する部分がないが、『日葡辞書』の説明の冒頭で「雨の降るさま」と記すように、静かに雨が降ることを表現している。

地藏坊(地藏舞)

\*よろよろ

こなたへもよろ〜、かなたゑもよろ〜、〜〜とい、  
すて、(58ウ2〜4)

旅の僧である地藏坊が、諸国行脚の途中で宿を借り、酒に酔ったために足元がふらつく状態になったまま自分の寺を目指すという話である。曲の末尾近くで、ふらついた足取りのさまが、オノマトペ「よろ〜」が繰り返されることで表現されている。

Toroyoro. 副詞。老人、病人、弱い人、酔った人などがよろめきな  
がら歩くさま。(補遺篇)

虎明本・天理本ともに「よろよろ」を繰り返す点は同じである。

虎明本 ひだりへよろよろ、右のかたへよろ〜、よろ〜と  
よろめけど  
天理本(抜書) 左のかたへよろ〜、右の方へよろ〜、よろ  
〜とよろめけども

膏葉練

\*ちやうど

ゆびの本へちやうと来る (60オ2)

全釈では「ここでは物が激しくぶつかりあう様を示す擬態語。またその瞬間に発する擬声語。はっしと。ぱしと。」と解する。『日葡辞書』の説明もおおむね同じではある。

Chodo. 副詞。かっちりと正確に、または、過不足なしに。『また、打ちなぐるさま。例、Chodo vrcu. (丁ど打ち)』

天正本のこの箇所は、源頼朝の富士の巻狩りに際して、大黒という名の馬が天高く逃げ去ってしまったので、鎌倉の薬売りがその馬を青葉によって引き寄せる場面である。馬が指元に当たるといには誇張も含まれるのだろうか、薬の効能によってともかくも馬が強く引き寄せられたというのである。

この部分は、虎明本、天理本ともに、馬がいけずきとなっていて、宇治川の合戦での先陣争いをした馬に変わっている。その場面での表現は、

虎明本 かのいけづきが、じり〜と、すいすゑられたをミテ

天理本 (抜書) すらり〜と、すうほどに〜、そのまゝゆびの  
さきまですいよせて

とあって、「ちやうど」に対応する表現はあるものの、「じりじりと」「すらりすらり」というように、激しさを感じさせる表現とはなっていない。

\*はったと

馬の方をはったとにらむ (59ウ9)  
舟の方をはったとねらむ (60ウ8)

この曲は京の薬売りと鎌倉の薬売りがそれぞれの売る薬の効能を自慢し、比べ合う話であるが、「はった」は両者がそれぞれ相手を威嚇する場面で使われている。

ただし、『日葡辞書』では

Fattato. 副詞。突然。例、Fattato aqireta. (はったと惘れた) 不意にびっくりした。

とあるだけである。『日葡辞書』には「はたと」も立項するが、その語義説明は「不意に、または、突然」であり、天正本のこの箇所の説明に合うものは見いだせない。また、虎明本・天理本ともに、右の二箇所に対応する部分は見られない。

**伊文字関 (伊文字)**

\*ほろりと

梅はほろりと落れども、鞠は枝とまった (63ウ6)

「梅」字の直前に「同」が小書き添えられ、直前の語句「山のはにかつた」に同じく小書きで添えられた「へ」と同じであることを指し示している。つまりは、この語句は謡われる部分である。したがって、こ

れまでに見てきたのと同じく、虎明本・天理本ともにほぼ同じ表現がとられている。

虎明本 へ梅はほろりとおつれ共

天理本(抜書) 梅はほろりとおつるとも

「ほろりと」は、力を加えずに梅の花びらが自然に落ちるさまを表している。固定化した章句と言ってよいだろう。

Fororiforito. 副詞。何か物が崩れるとか、ぼろぼろ砕けるとかするさま。『また、眼から涙の落ちるさま。』

Fororito. 同上。『Fororito doxinga vocotta. (ほろりと道心が発つた) 心やさしく、信仰する気になる。』

### 〔浜千鳥(千鳥)〕

\*ちりちり

はま千鳥の友よぶ聲は、ちりくやちりく、くくくやく、とひやうしにかゝりてまふ。(72ウ2)

『日葡辞書』に

Chirichirito. 副詞。勢いよく軽やかに流れるさま。『また、水が滴るさま、あるいは、水が垂れ落ちるさま。』

とあるものの、全釈が言うように「擬声語。チドリやヒバリなど小鳥の鳴き声。」と見なければなるまい。

ただし、本文は

ちりくやちりくくくくやく

であり、くの字点が多用されている。大藏流虎明本と和泉流天理本の本文はそれぞれ、

虎明本 へちりくやく ちりくやちりくと、ともよぶ所に

天理本 拍子にかゝつて、『はま千鳥の友よぶこゑは』とおほせら

るれば、身どもが『ちりくや、ちりく』と云て、網をふするまねをする事じや

とあることを参考にすれば、

① ちりくやちりく、② ちりくやちりく、③ ちりくやちりく、④ ちりくやちりく

の①②はいずれも「ちりちり」で、③も直前の②と同様、「ちりちり」と読むのであろう。問題は④のくの字点一つをどう解釈するか。厳格に考えれば、「ちり」と考えるべきであるかもしれないが、「ちり」の二文字をくの字点で繰り返す際に、さほどの厳密さを求めなかった可能性はあろうと考えて「ちりちり」と考えてもよいのではないか。右に掲げた虎明本中に見られるくの字点一つの例も同じと考えたい。よって、この項の冒頭に掲げたように、「ちりちり」という語形を四例分として扱っ

た。

**若菜**

\*ゆらりしやらりと

へ行も行れず、もどられず。同ゆらりしやらりと波の上のさかもり。(88ウ7)

新春の若菜摘みに出かけた大名が大原女たちと歌う謡の部分である。

「ゆらりしやらり」は酒宴のさまを波の上の酒盛りに喩え、「のんびりゆらゆらゆれ動くさま」(全釈)を表したものである。大蔵流虎明本・和泉流天理本(抜書)ともに「ゆらりさらり」というオノマトベが使われている。

虎明本 ゆらりさらりとなみのうへのさかもり、はうごぐさをさか

なに、いさや酒をのまふよ

天理本(抜書) ゆらりさらりと、浪の上の酒もり、はうご草をさか  
かなに、いさや酒をのまふよ

『日葡辞書』には「ゆらりしやらり」での立項はないものの、「ゆらりと」「しゃらりと」は記載されている。

Yurario. 副詞。さつと軽やかに跳んだり、登ったり、または、馬に乗りたりするさま。例、Yurario vmani vchinoru. (ゆらりと馬に打ち乗る) さつと巧みに馬に乗る。

Yurariyurario. 副詞。馬に乗るなり、徒歩で行くなりして、悠然

として行くさま。

Yurayurario. 副詞。Yurarioの条を見よ。(この項のみ補遺篇)

Xaraxarario. 1. xarario. 1. xararixarario. 婦人の帯の端がだらりと下へ垂れているなど、何か物が下へ垂れ下がっているさま。『また、足にはいた草履その他の履物が、街路などを通る時に音を立てたり、鳴りひびいたりする形容。』

ただし、その説明は軽やかなさま、余裕のあるさまなどで、ゆれ動くさまに近いのは「婦人の帯が垂れ下がるさま」ぐらいのものか。

**比丘貞**

\*づんばと

本よりおりやう、おわしもめもすつはと以ければ(94ウ7)

全書は「方言の「ずっぱり」と同じく、澤山にの意であろう。」、全釈は全書の頭注を引きつつも不明として、次いで以下のように記す。

『日本国語大辞典』「ずっぱ」に、物の多いさまを表す語として天正本この例を挙げ、また青森県方言として「弁当箱にずっぱと詰める」「汚ない物がずっぱとたった」を掲げる。いまこれに従いずっぱとよみ、たくさんの意の副詞とする。「どっさり」とでも口訳すれば語感が近いであろうか。(略)「あだら」アホンダラが愚か者の意とそくぎに理解できるのは関西人であるから、「あだら」と共に用いられている「すつは」も関西語でなければならぬ。おそら

く「すつは」はたくさんを意味する中世末期の関西語であって、漸次地方へ伝播していった消滅し、現在は青森県方言としてわずかに残っているであろう。

しかし、「ずんば」については、『時代別国語大辞典 室町時代編』が施す解釈がもっとも妥当であろう。

ずつばと(副) 数量の、いかにもおびただしさま。

用例として虎明本狂言の「お冷やし」の例「水をずつはと入て」と、天正本狂言のこの箇所が引用されている。『日葡辞書』においても

Zzubato. ツバト (づぼと) 副詞。容器などに物がいっぱいになり

つくるさま。例、Mizzuga zzubato gozaru. (水がづばとづぐる)

容器が水で一杯になっている。

と説明されている「づばと」の撥音挿入形と見るべきであろう。気になる点といえば、液体に関することが多いように思えることだが、この点はさらなる考究が必要であろう。なお、天理本は天正本と同じく「ずんば」であるが、虎明本はオノマトペを用いず「おほく」と表現する。

虎明本 おあしもめゝも、おほく持たれゝ

天理本(抜書) おあしもめゝも、すつはと持たれは

### 梟

\*ほほ

ほほやく。ひやうしどめ。(95ウ4)

弟に取り憑いた梟の精を、兄が山伏に祈禱を依頼するが、見事に失敗し兄にも移るといふ話の終幕の部分である。

このオノマトペに対する説明は、全釈が示す「ふくろうの鳴き声の擬声語。」に尽きるが、虎明本・梟では「ほゝん、のりすりおけ」という別の聞きなしが取り入れられている。また、天理本・梟では、本文中に「一こゑなく」「一こゑないて」とあり、前者の頭注に「波形本に「ほゝん」と鳴くとある」と示す。梟の鳴き声と言えば「ほほ」または「ほほ」を含む形が一般的になっていたということであろうか。ただし、天理本の抜書部分には梟の鳴き声は描写されていない。

### 二千石

\*はらりと

いづくともしらず雁一むらはらりととぶ。(104ウ9)

「うちみ」の項に既出。全釈では「複数のものがいっせいに動くさま。または軽くすばやいさま。」と解釈するように、雁の群れが一斉に飛ぶさまを表現している。ただし、源義家の逸話として知られるこの部分は、虎明本・天理本には対応箇所が見られない。

#### 四 おわりに

以上、縷々述べ来たったが、天正狂言本にみられるオノマトペの意味・用法の精査に終始した結果となった。もちろんこれで十分な考察とは言えないが、少なくとも過去の日本語におけるオノマトペを正確にかまえることの難しさは明らかになったと思う。

これは自戒を込めて思うことだが、オノマトペについて考える時、現代語であれば内省によっておおよその意味をつかまえることができるであろう。しかし、過去の日本語を相手にする際、現代語のオノマトペに対して抱く印象が紛れ込むことはないだろうか。オノマトペはその音形に基づいて聴覚的印象が把握されるのが基本であるから、過去と現代との間にさほどの違いはないということもあるかもしれない。けれども『源氏物語』などに用いられるオノマトペとして知られる「つぶつぶと」などは、現代語の語感からは遠く離れていると言わざるをえない。現代語の語感をなるべく切り離して古典作品を丹念に解釈することを積み重ねてゆくほかないだろうかと考えている。

オノマトペの歴史研究については、中里理子氏の『オノマトペの語義変化研究』（二〇一七年、勉誠出版）などが出て、少しずつ歩を進めはじめた段階であろう。氏のように歴史を俯瞰する立場からのオノマトペ研究はもちろん欠かれないが、同時に個々の資料におけるオノマトペの意味・用法の記述研究もまた重要ではないか。両者が相まったかたちで日本語におけるオノマトペの歴史が明らかになることを期したいと思う。

#### 参考文献

- 池田廣司・北原保雄『大藏虎明本狂言集 本文編 上・中・下』（一九七二〜八三年、表現社）
- 内山弘編著『天正狂言本 本文・総索引・研究』（一九九八年、笠間書院）
- 大塚光信編『大藏虎明能狂言集 翻刻 註解』（二〇〇六年、清文堂）
- 小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』（二〇〇七年、小学館）
- 金井清光『天正狂言本全釈』（一九八九年、風間書房）
- 北川忠彦ほか校注『天理本狂言六義 上・下』（一九九四〜五年、三弥井書店）
- 笹野堅校訂『大藏虎寛本 能狂言 上・中・下』（一九四二〜四五年、岩波書店）
- 土井忠生訳『ロドリゲス 日本大文典』（一九五五年、三省堂）
- 中里理子『オノマトペの語義変化研究』（二〇一七年、勉誠出版）
- 古川久校註『日本古典全書 狂言集・下』（一九五六年、朝日新聞社）
- 『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五〜二〇〇一年、角川書店）
- 田山方南校閲 北野克亨『名語記』（一九八三年、勉誠社）